

近現代日本社会における
異文化受容過程とハロウィン
文化の現状に対する一考察

A Study of Present Conditions
of Halloween and
Acculturation Process for
Foreign Culture in Modern
Japanese Society.

1. 論文タイトル：近現代日本社会における異文化受容過程
とハロウィン文化の現状に対する一考察

2. 論文タイトル（英語）：A Study of Present Conditions of
Halloween and Acculturation Process for Foreign Culture
in Modern Japanese Society.

3. キーワード：ハロウィン・異文化受容・地域間比較研究・
収穫祭・宗教・儀礼

4. 論文要旨

10月31日、渋谷の街は異形な格好をした人たちであふれる。ハロウィンというイベントを若者が中心となり本来の意味とは違ったやり方で祝っている。もともとハロウィンというイベントはディズニーリゾートなど商業施設を中心に小さくイベントが行われていた。

しかし、ここ数年で急にイベントの形は変化した。ハロウィン同様に商業戦略から始まったバレンタインの経済効果を一気に追い抜き、現在では国内のイベントの中で一番の経済効果を誇るとも言われている。ただ、ハロウィンはキリスト教圏のイベントが発祥である。宗教的に関わりのある人はかなり少ないはずである。それなのに日本経済がそこまで活発になるのはなぜだろうか。

これを明らかにするために、他の海外から入ってきた文化との比較によりハロウィンが流行していることについての仮説を立て、アンケート調査を行った。そこで、海外文化が日本に定着するまでの条件を発見した。

本稿は海外文化であるハロウィンの日本定着について、他の海外からの文化と比較するとともに、日本の異文化受容を関連付けて考察し、より定着させる方法を明らかにすることを目的とする。

以下、第1章では日本の異文化受容および、ハロウィン以外の海外文化の起源から現在までを述べ、第二章ではハロウィンの起源と現在の日本での姿を明らかにし、比較をしたうえで定着の度合いについての仮説を立てる。第3章ではアンケートの諸データを用いてその実態について明らかにし、第4章では総括として結論をまとめる。

5. 論文要旨

On October 31st, Shibuya city will be filled with people who dresses up in strange costume. People especially young generation celebrate their own

style of Halloween party that is totally different from its original way of celebrating the festival.

Originally, Halloween was a small event mostly for commercial facility such as Disney resort. However, the form of this event has suddenly changed in recent years. It is said that Halloween passed Saint Valentine's day to become the most effective event for Japanese economy among all domestic events, which was begun as a commercial strategy.

In fact Halloween was birth as Christian holiday. Although there are not so many Japanese people relates with these Christian event because of religious reasons, that stimulate the economy somehow.

Due to find out why Halloween is in style, we set up a hypothesis at first, and afterward made a comparison between Halloween and other cultures which came into and fixed in Japan. In addition we had questionnaire on Social Network Service about some event.

In this report, we consider about Japanese type of acculturation through Halloween, and our purpose is to figure out the most effective way of long-term sustainment for Halloween in Japan.

Therefore, in chapter 1, we described about Japanese style of acculturation for foreign culture and these histories from the birth to recent condition besides Halloween.

In chapter 2, we explained origins of Halloween and analyze this recent actual situations in Japan. Afterward we made comparison between previous and present conditions in order to set up hypothesis about degree of fixation.

In chapter 3, we revealed actual conditions of Halloween based on the result of questionnaire.

In chapter 4, we made conclusion that, in case of Halloween, what is the best way to take root more deeply and widely for all of district in Japan.

【目次】

第 1 章 はじめに

第 1 節 文化の受容

第 2 節 キリスト教圏での文化の定着

第 3 節 日本での文化の定着

第 2 章 ハロウィンに対する問題提起

第 1 節 ハロウィンの起源

第 2 節 現在の日本のハロウィン

第 3 章 アンケート調査

第 1 節 アンケート調査

第 2 節 マトリクス図

第 4 章 まとめ

参考文献・データ出典

第 1 章 はじめに

第 1 節 文化の受容

近年、10 月 31 日に仮装して町中を歩き、騒ぐというイベントが存在する。これは、一般的にハロウィンと呼ばれ、日本古来より存在する文化ではない。キリスト教圏の文化が換骨奪胎され、2015 年 10 月 31 日には「渋谷フェス Halloween2015¹⁾」というイベントが渋谷で行われた。このイベントは渋谷のクラブやライブハウスを貸切って、若者たちがハロウィンの文化・習慣の模倣をし、仮装を行っている。

本章では、ハロウィンという宗教的行事が誕生し、それが各国に広まる歴史的過程を振り返りながら、異文化の行事の社会的受容についての問題点を探っていくこととしたい。

現在、日本で行われている文化は起源が海外のものが多い。クリスマスやバレンタインはその代表例だろう。日本は海外の文化を受容し、自国の文化とすることがあるのだ。日本が文化を受容する特徴として、大きく 3 つの点があげられる。¹ 1 つ目は日本の海外に対する認識である。安達理恵氏 (2006) の論文²⁾によるとアジア圏とキリスト教徒を主とする欧米圏を比較したとき、日本人は欧米圏への関心度が高い³⁾。

コメントの追加 [若林幸男1]: いつの話? 漢字を使ったり、遣唐使、遣隋使は?

¹ 日本最大級のフリマアプリであるメルカリが協賛して運営している。「渋谷フェス Halloween 2015 特別協賛のお知らせ」ならびに mercari Halloween Night 開催報告」参照。

https://www.mercari.com/jp/info/20151009_halloween/ (最終閲覧日 2016 年 9 月 13 日)

² 安達理恵「日本人の異文化受容態度に関する実証的事例研究—異文化理解教育の方向性を考察する異文化間コミュニケーション研究」『名古屋大学大学院国際開発研究科博士論文』、2006 年。

³ 安達理恵「日本人の異文化需要態度にみられる傾向—地方都市での年代

特に第二次大戦後には戦勝国の文化が日本国内に浸透したものと考えられる。

2 つ目は文化を受容しやすい年代である。向井有理子氏と渡部美穂子氏の論文によると、日本、ドイツ、イギリスの各国についてその異文化受容態度を比較したとき、日本でのみ年代による違いがみられた。日本では年齢が上がるにつれて異文化受容態度が低くなるという⁴。つまり、海外からの文化は若年層の方が受け入れやすいということを示している。また 3 つ目は文化を受容しやすい環境である。多くの情報が内外から集まる都市部に居住していると、他の地域にいる場合よりも異文化受容態度が促進されるともいわれている⁵。つまり、日本は都心部の若年層が中心となって文化を受容していると考えられる。

一般的にある文化はその地域に受容されていく段階でその文化本来のもつ意味が形を変えて定着していく。

クリスマス、バレンタイン、メーデー、イースターの起源と、どのように日本に現在の形で定着するに至ったのかを考察していく。

第 2 節 キリスト教圏での文化の定着

メーデーの起源はメイポールの祭りである。これは「五月祭」という意味で、ヨーロッパでは春の訪れを祝うお祭りとして、各地で開催されてきた。メイポールとは「五月柱」ともいわれ、これはもともと、ヨーロッパの樹木信仰、あるいは樹霊崇拝に根ざすものであった。とくにケルト、ゲルマンのオーク樹信仰は、森に住んでいたヨーロッパ先住民たちの習俗の名残も如実に示している

別・国別態度調査より一『名古屋外語大学外国語学部紀要』第 35 号、pp. 153-173、2008 年。

⁴ 向井有理子、渡部美穂子「異文化受容態度：日・独・英の比較」『都市文化研究センター』2003 年。

⁵ 安達理恵「日本人の異文化需要態度にみられる傾向——地方都市での年代別・国別態度調査より一」『名古屋外語大学外国語学部紀要』第 35 号、pp. 153-173、2008 年。

コメントの追加 [若林幸男2]: 文章を日本語に変える

⁶。昔、ヨーロッパ各地では精霊によって農作物が育つと考えられており、精霊は女王や乙女のかたちで表現されていた。このため、春の訪れを祝う日は「植物の生育、動物の繁殖の季節を祝う日」と考えており、この時期の乙女たちや男女の結婚は象徴的なものとされた。そこから「五月女王(メイクィーン)」や、子供達の擬似的結婚式という風習が生まれた。

それが人間らしい生活を要求する労働者のたたかいであるメーデーと一緒にされるようになった。世界各地で毎年五月一日に行われる労働者たちが一斉に労働者の権利と政治的要求を掲げてデモンストレーションを行う祭典である。

二つの祭りが一緒になったことで世界各地に定着していったのである。

イースターは、クリスマスやバレンタインデーと同様、キリスト教の祭日である。磔にされたイエスが墓からよみがえったことを祝う日で、日本語では「復活祭」とも呼ばれる。日本ではあまりなじみがないが、キリスト教徒にとってはイエス・キリストが生まれたクリスマスよりも重要な宗教的意味を持ち、キリスト教を伝統とする国の中には、イースター前後が国の休日となる国もある⁷。キリストが復活したのは日曜日であったため、イースターの曜日は日曜日であることだけは決まっているが、日付は毎年変わる。現在ではイースターの日、春分の日後に訪れる最初の満月直後の日曜日と決められている。このイースターのお祝いには何より卵が欠かせることができない。なぜなら卵はイエス・キリスト復活の象徴であるからであり、この日のために「イースター・エッグ」と呼ばれる卵が用意される⁸。

ゲルマン民族をはじめ古代の人々には春の訪れを盛大に祝う民族的習俗があった。

⁶ 浜本隆志・柏木治 『ヨーロッパの祭りたち』明石書店、2003年。

⁷ 栗原 典子・著 『スラヴ世界のイースター・エッグ -ピーサンキからインペリアル・エッグまで-』株式会社 東洋書店、2008年。

⁸ アンソニー・F・アヴェニ・著 『ヨーロッパ祝祭日の謎を解く』株式会社 創元社、2006年。

コメントの追加 [若林幸男3]: フォント違う、やはりコピペをまだ平気で僕に送り付ける、ここで添削をやめます。

書式変更: インデント: 最初の行: 1 字

ローマ教会はこのような異民族へのキリスト教の宣教にあたり、異教である土着信仰の習慣を完全に禁止すると反感を買う可能性があるため得策ではないと考え、土俗の習俗を取り込みつつキリスト教文化を構築していった。つまり、こういった異教のお祭は、キリスト教の教えに合致するように柔軟に形を変えて残されたのである。そしてイースターもそのひとつで、イースター発祥は自然界における復活とイエスの復活を関連づけたものであるとされている⁹。

第 3 節 日本での文化の定着

バレンタインデーは 2 月 14 日で、聖バレンティヌスに由来する記念日であるとされており、欧米を中心に世界各地で男女が贈り物をしあう日となっている。ヨーロッパでは、男女がそれぞれ花・菓子・カードなどを恋人や親しい人に贈る¹⁰。日本では、来日した外国人によって行われてはいたが、一般にひろまったのは、昭和 50 年代以降であり、製菓会社の宣伝によって、女性から男性にチョコレートを送り、愛の告白をする日として日本独自のバレンタインの習慣が作られた。また、年を追うごとに、日本でのバレンタインデーは、恋愛感情の有無ではなく、会社・学校・家族といった社会の中で、女性から男性に贈り物をする習慣がひろまっている¹¹。3 月 14 日はホワイトデーといい、バレンタインデーのチョコレートの返礼としてキャンデーなどを男性から女性に贈る日として知られている。ホワイトデーは、飴を製造する業界などの宣伝により始まった日本独自の習慣である¹²。

クリスマスが日本に定着したのは¹³、戦後から高度経済成長期にかけてだと考

コメントの追加 [若林幸男 4]: 修正せよ

コメントの追加 [若林幸男 5]: 同上

⁹ 浜本隆志・柏木治 『ヨーロッパの祭りたち』明石書店、2003 年。

¹⁰ 浜本隆志 『バレンタインの秘密ー愛の宗教文化史ー』平凡社、2015 年

¹¹ 福田アジオ、菊池健策、山崎裕子、常光徹、福原敏男 『知っておきたい 日本の年中行事事典』2012 年。

¹² アンソニー・F・アヴェニ 『ヨーロッパ祝祭日の謎を解く』創元社、2006 年。

¹³ 保坂高殿 『ローマ史のなかのクリスマス 異教世界とキリスト教 1』教文館、

えられる。戦後、街中にはクリスマスが近づくとクリスマスツリーが飾られた¹⁴。また、全国紙製品統制組合は、GHQからクリスマス・カードの製造を命じられたり、玩具業界にも戦勝国向けの玩具製造の指示が下され、サンタクロースなどのクリスマス用品が輸出され始めたりするようになった。また、新しくなった教科書には、クリスマスが取り上げられるなど、国民の生活に少しずつなじんでいった¹⁵。高度成長期には、いわゆるベビーブームと言われる世代によって、子供の数が爆発的に増加した。「不二家」は昭和二十五年(1950)に日本独特のクリスマス・デコレーション・ケーキと呼ばれるものの原型を作り、売り出した。これがサラリーマンのボーナスが増えたこともあって、大ヒットした。酔った父親が家族への言い訳にと、クリスマスケーキを片手に帰宅することもあったという。こうして日本には宗教行事を抜きにしたクリスマスが形作られたのである。この換骨奪胎ぶりは、日本人にとってはもともと宗教行事を本来の意味から切り離して、世俗化してしまう日本古来の習俗ともいえる¹⁶。仏教を葬祭の儀礼に変え、神道を冠婚用の手続きに使い、キリスト教の信者でなくても教会で結婚式を挙げる。つまり、クリスマスやバレンタインは商戦として利用されたことによって日本に土着化してきたといえる。

第 2 章 ハロウィンに対する問題提起

第 1 節 ハロウィンの起源

2005 年

¹⁴ 村上良夫「クリスマスの起源—その歴史的背景—」pp. 241 - 250, 『北陸大学紀要』第 12 号、pp. 241 - 250、1998 年。

¹⁵ 金 命柱「占領下(1945-1952)日本のクリスマス」『国際日本学論叢』9 号、2012 年。

¹⁶ クラウス・クラハト、克美・タテノクラハト『クリスマス—どうやって日本に定着したか』角川書店、1999 年。

私たちが今慣れ親しんでいる10月31日を祝祭として行われるハロウィンとは元々、古代ケルトの土着宗教であるドルイド教のサムヘイン祭¹⁷を起源としている。では、どのような変遷を辿って現在のようハロウィンに至ったのだろうか。そもそもサムヘイン祭とは、ドルイド教の暦において11月1日は新年の始まり、つまり「冬」の季節の初日を迎える祭り¹⁸であり、10月31日は一年の終わりと共に夏の収穫を祝う意味もあった。また夏から冬に変わる時期になると、現世と霊界の間に門が開かれてお互いの世界を行き来できると信じられていた。そのため悪さをする「妖精」や「悪霊」、祖霊の供養をこめて火を焚き、農作物を供えるという儀式が行われていた¹⁹。後に一連の信仰から中世以降、ケルト人の間に異界の霊から身を守るために自らその姿に変装し、家々を回る習慣が生まれていった。一方ヨーロッパはローマ帝国の支配下にはいり国教とされたキリスト教の布教活動が進み、各地で土着宗教からカトリックへと改宗されていった。ドルイド教もこの影響を受け、キリスト教行事と一本化させるためにリサ・モートン氏²⁰は「教皇グレゴリウス三世が殉教者の祝祭を十一月一日つまりサムヘイン祭の日に移動させ、以後、この日の『すべての聖人』の祝典とすると指示した。」と述べている。つまり、殉教者の祭りである諸聖徒日 (All Hallows' Day)²¹の前日の祝日、すなわちハロウィン (Halloween) をキリスト教の祝祭に改めた²²。このようにして、ケルト人の土着宗教であるドルイド教を起源とするサムヘイン祭はキリスト教に取り込まれて、融合していき、次第に各地で形を変え、アメリカで「トリック・オア・トリート」の文化に発展しつつ現在のハロウィンに至る。

¹⁷ ヘクター・マクドネル（訳：山田美明）『ケルト、神々の住む聖地 アイルランドの山々と自然』株式会社創元社、2014年。

¹⁸ 関口英里「エンターテイメントとしての祝祭空間—ハロウィン分析を通して見るアメリカ社会—」『同志社女子大学学術研究年報』54(1)号, pp.123-146, 2003年。

¹⁹ フィリップ・ヴァルテール（訳者 渡邊浩司/渡邊裕美子）『中世の祝祭 伝説・神話・起源』株式会社原書房、2007年。

²⁰ 同上。

²¹ 植田重雄『ヨーロッパの祭と伝承』早稲田大学出版部、1985。

²² 浜本隆志・柏木治『ヨーロッパの祭りたち』株式会社明石書店、2003年。

第 2 節 現在の日本のハロウィン

日本記念日協会（長野県佐久市）の推計によると、ハロウィンの市場規模は 15 年が 1220 億と、4 年で倍増。バレンタイン市場は 1250 億円とほぼ並んでいる。

現在、日本において 10 月 31 日のハロウィンは、バレンタイン商戦と並ぶ規模にまで成長したのだ。²³。ハロウィンを日本人が知るきっかけになった一番の要因は東京ディズニーリゾートだろう²⁴。2001 年頃からイベントとして 10 月ごろ期間限定のショーが行われている。また、ここ数年では渋谷の街のクラブを貸し切って大々的にハロウィンのコスプレイベントが行われている²⁵。ただ、時間帯も遅く場所も渋谷であることから、年齢層的には大学生を中心とした、20 代が圧倒的に多い²⁶。そして、20 歳前後の若者は「仲間との一体感など、いつもと違う気分が味わえるイベントに興味がある」と5 割以上の人が答えるという調査（2014 年 12 月 10 日付日本経済新聞）からもわかるように、若者はイベント好きな傾向が一般的に知られている。その背景には、インターネットを通じて広く薄く繋がり続ける SNS 世代特有の人間関係がある²⁷。これらの理由

コメントの追加 [若林幸男6]: 数字で根拠をどこかで示したっけか？

²³ 「月曜も楽しむハロウィーン、雑貨店、自宅用グッズを充実、市場規模、バレンタイン並み、親子で着られる衣装も」『日経MJ（流通新聞）』2016 年 9 月 7 日号。

²⁴ 栗田房穂（2001）『ディズニーリゾートの経済学』東洋経済新報社

²⁵『渋谷フェス Halloween 2015 特別協賛のお知らせ ならびに mercari Halloween Night 開催報告』（https://www.mercari.com/jp/info/20151009_halloween/ : 情報最終確認日：2016 年 9 月 13 日）

²⁶ 『ホットペッパーグルメリサーチセンター』（http://www.recruit-lifestyle.co.jp/news/pressrelease/gourmet/nw13371_20151016 :（最終閲覧日 2016 年 9 月 21 日）

²⁷ 田畑恒平、西条昇、木内英太 「ハロウィン・イベントのライブストーリーミング：『マスコミュニケーション受動』から『エンターテイメント共創』へ」『江

のために、現在のハロウィンは年代や場所がかなり限定されたイベントであると言えるのではないだろうか。

第 3 章 アンケート調査

第 1 節 アンケート調査

今回私たちは、ハロウィン は実は東京の一部盛り場でしかも若者を中心とするなど、空間的にも年代的にも限定的な流行に過ぎないのではないだろうか、という点についての仮説を検証するために、アンケート調査を行った。ハロウィンはキリスト教圏のイベントが発祥 である。そのため宗教的関わりの 少ない日本では ごく一部で大きな盛り上がりを見せている が、全国的、全年齢層に広まることにはなっていないという 点を明らかにする ことを目的としている。また、その特徴を把握したあと、海外文化が日本に定着するための条件とは何かという問題を検討する こととしたい。インターネット上で拡散したこの調査において得られた有効回答数は 83 である。

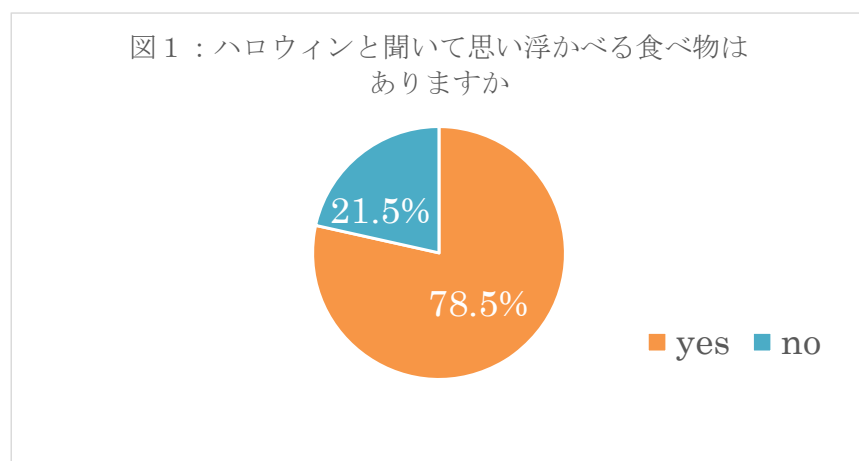
今回のアンケート調査は、海外から流入した文化の中でも定着の水準がかなり高いクリスマスと、元来日本の文化として根付いているお正月を、ハロウィンと並べて 3 つの文化を比較する形で作成した。以下にこの調査から得られた結果の考察を記す。

この調査では、ハロウィン、クリスマス、お正月について連想する食べ物、音や音楽などがあるか、またどのような人と共に過ごすか、求めるものは何か、といった共通の質問を作成した。

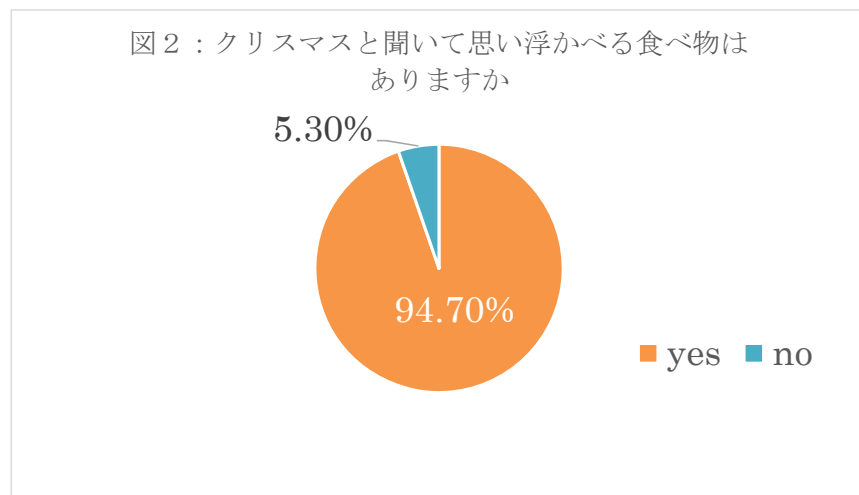
まず食べ物に関する質問では、ハロウィンと聞いて思い浮かべる食べ物があると回答した人は 78.48% と比較的高かったものの、クリスマスにおいては 94.67%、お正月は 95.89% と、定着の水準の違いが顕著にあらわれた。クリスマスにはチキンやケーキ、お正月にはお節料理などを実際に食べる人が多いが、

戸川大学紀要』26号、2016年。

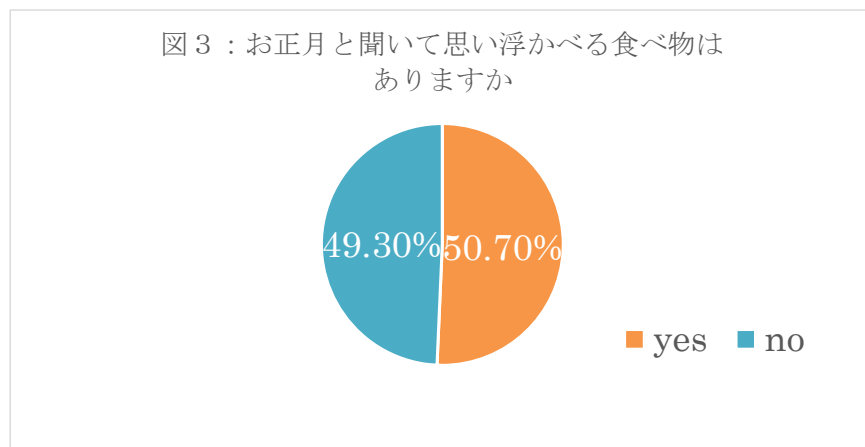
ハロウィンにおいて連想される食べ物といえばおそらくかぼちゃやお菓子のことであり、それらを実際に食べるという人は日本には少ないということがこの数値の差の原因として考えられる。



出典：アンケート結果より作成



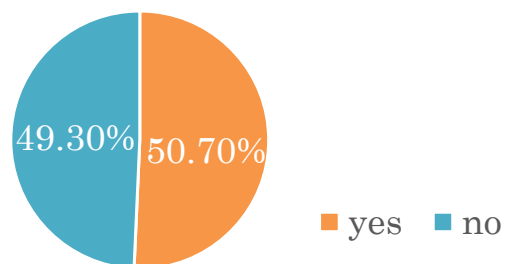
出典：アンケート結果より作成



出典：アンケート結果より作成

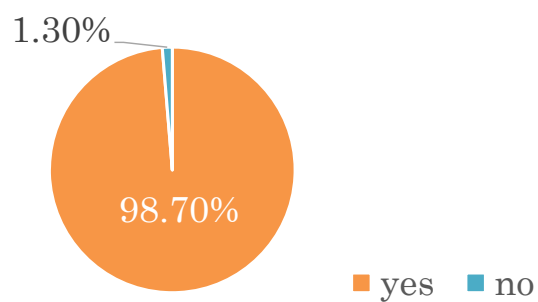
次にいわゆるジングルなどの、音や音楽に関する質問では、ハロウィンと聞いて思い浮かべる音や音楽があると回答した人は 50.65%と半数近くだったのに対し、クリスマスは 98.67%、お正月は 72.6%と、ここでも差が出る結果となった。この質問に対して約半数の人々が、ハロウィンと聞いて思い浮かべる音や音楽がないと答えている。この結果はクリスマスとお正月に対して、ハロウィンを歌う楽曲が少ないために聴覚的に思い浮かべる特徴がないというように考察できる。約 99%もの人がクリスマスに対して思い浮かべる音や音楽があると答えた要因として日本でも外国でもクリスマスソングが数多く存在することが挙げられる。また、日本にはお正月について歌う民謡や童謡が数多く存在するため、クリスマスほどにはのぼらないが比較的多くの人が音や音楽を連想したのではないだろうか。

図 4 : ハロウィンと聞いて思い浮かべる音楽はありますか

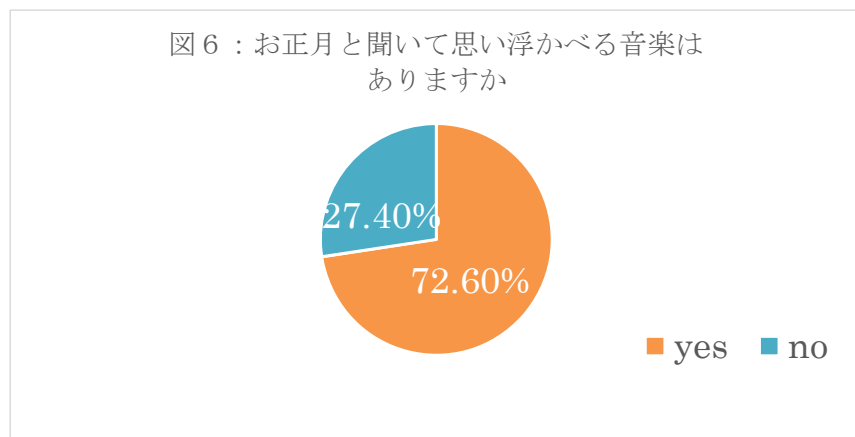


出典 : アンケート結果より作成

図 5 : クリスマスと聞いて思い浮かべる音楽はありますか

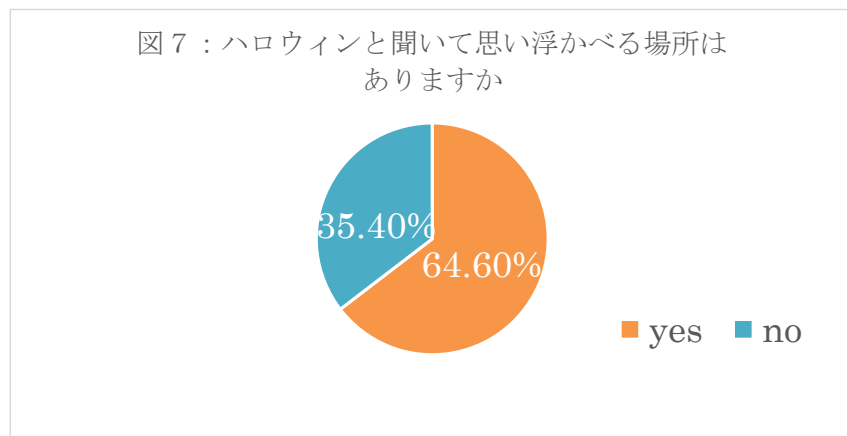


出典 : アンケート結果より作成



出典：アンケート結果より作成

次に、ハロウィンイベントの認知度を確かめるために、ハロウィンと聞いて思い浮かべる場所があるか、またそれはどこなのかという質問を、選択肢を設けて行ったところ、以下のような結果となった。



出典：アンケート結果より作成

それはどこですか

表 1

| 渋谷 | 川崎 | 地方都市 | その他 |
|--------|----|-------|--------|
| 79.17% | 0% | 2.08% | 18.75% |

出典：アンケート結果より作成

近年、ハロウィンの日に仮装をした若者たちで埋め尽くされた光景がニュース番組などにも取り上げられるようになった渋谷駅は、やはりハロウィンイベントとしての認知度が高いようである。一方、同じようにハロウィンイベントが行われていた川崎を選択肢に入れていたものの、その認知度は本調査においては0という結果になった。また、大多数が渋谷駅を選んだのも日本の文化受容の特徴とも合致する。ハロウィンイベントは、まだまだ全国に浸透しているとは言い難いだろう。

次に、ハロウィン、クリスマス、お正月をどのような人と過ごしたいかという質問では、それぞれに特色の違いがあらわれた。ハロウィンで一番大きな割合を占めたのは、友人と答えた76%だった。同様にクリスマスは恋人と答えた76%、お正月は家族と答えた人が91.78%もの割合を占めた。これらは次に述べる各イベントに求めるものという質問につながっていると考えられるため、考察は以下の質問結果にまとめて記す。

表 2

| | 家族 | 友人 | 恋人 | その他 |
|-------|--------|-------|-------|-------|
| ハロウィン | 4% | 76% | 8% | 12% |
| クリスマス | 16% | 5.33% | 76% | 2.67% |
| お正月 | 91.78% | 5.48% | 1.37% | 1.37% |

出典：アンケート結果より作成

最後の質問は、それぞれのイベントに求めるものは何か、というものである。この質問は選択肢に対し、複数回答ができるようにした。以下がその結果である。ハロウィンとクリスマスにおいては、イベント自体に非日常感を求めると

いう回答が半数を占めた。ここでの両者の違いは、一つ前の質問にあったように、イベントをどのような人と過ごすかという点である。ハロウィンと、クリスマスは恋人と、いずれも非日常感を楽しむというのが、一般的になりつつある。これに対してお正月は、家族との団らんが 86.67%もの割合を占めており、一つ前の質問においても、お正月を家族と過ごすと回答した人が 91.78%にもものぼった。

表 3

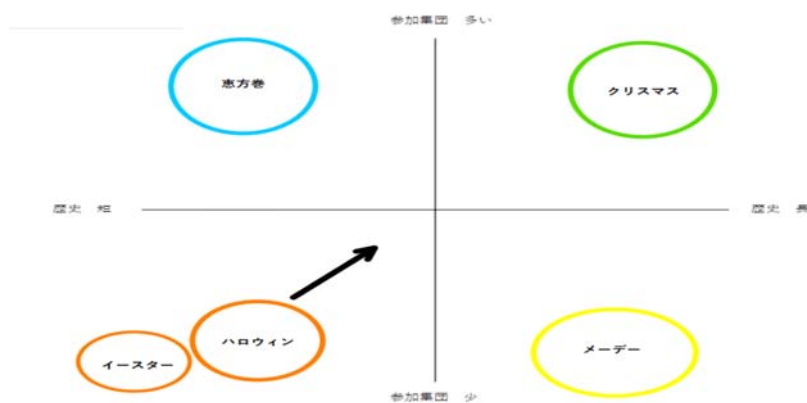
| | 仲間との一体感 | 非日常感 | 写真映え | 新しい交流 | 家族との団らん |
|-------|---------|--------|--------|-------|---------|
| ハロウィン | 38.36% | 78.08% | 19.18% | 13.7% | 5.48% |
| クリスマス | 12% | 70.67% | 12% | 6.67% | 22.67% |
| お正月 | 4.11% | 6.85% | 2.74% | 0% | 89.04% |

出典：アンケート結果より作成

以上が今回のアンケート調査によって得られた結果である。

第 3 節 マトリクス図

図 8



アンケートの結果より、クリスマスは音楽や料理といったイベントを感じる特定のものが存在する水準がお正月同様に高かった。これは、クリスマスが日本に一イベントとして定着していると考えられるだろう。アンケートの結果とは別に、縦軸にそのイベントへの参加集団の多少、横軸に文化が入ってきたと考えられる時期から現在までの期間(歴史)をとったマトリックス図を作成した。このマトリックス図を作成した意図はそれぞれのイベントが日本に入ってきてからの歴史の長さや定着の程度の関連性を見やすく提示するとともに、ハロウィンの今後の発展と日本社会への定着のためにはどのイベントの形態に近づけていくことが重要であるかを明確にするためである。

まずこの図において、最も歴史が長く、認知度としての参加集団が多いといえる範囲に位置するクリスマスは日本社会に定着した海外文化の代表的な例である。大手製菓メーカーや、コンビニチェーンでもクリスマスになるとケーキを大々的に売り出したり、CMや商店などでもクリスマスソングが流れたりする。

メーデーは、歴史は長いですが、現在イベントとして行われておらず知名度も比較的低いイベントの例として図内に組み込んだ。ゴールデンウィークのさなかではあるが、祝日でもなく実際に労働者の祭典としての意味は薄れてきている²⁸ので、認知度としては下がってきていると考えられる。

恵方巻きは海外から流入した文化ではないが、大手コンビニチェーンの商業戦略的に取り入れられてから日は浅いにも関わらず、日本全国の生活者の参加率が高いと思われるイベントの例として補欠的に組み込んだものである。

本論文においてテーマとして取り上げているハロウィンは、歴史は短く、参加集団も若年層に偏っているのでイースターとともに上記のように分類される。このマトリックス図から考察すると、ハロウィンの定着のためにはクリスマスのような形態に近づけることが望ましいということがわかる。クリスマスが幅

コメントの追加 [若林幸男7]: やはりこれをも
う少し詳細に定義せよ。三か集団の数か？参
加者の数か？そしたらメーデーのほうが多い
のではないか？数的根拠を示さないから論旨
がガタガタになる。再考せよ。

²⁸ 『リクナビ next ジャーナル』

(<http://next.rikunabi.com/journal/entry/20150501> : 最終確認日 : 2016 年 9 月 27 日)

広い年齢層の人々に認知され、日本各地で年中行事の一つとして行われているのに対し、ハロウィンは渋谷や六本木などの都市部でのみ行われているイベントで、参加する年齢層を見ても大学生や専門学生が多いことから認知されている年代が偏っていることが考えられる。1 章の文化受容で述べたように、日本人は若年層のほうが文化を受け入れやすい。したがってハロウィンは今後定着していくには、年月を経るのと同時に、より多くの年代に文化として受け入れられていく必要がある。

第 4 章 まとめ

近年、すさまじい勢いで日本経済に影響をもたらすようになり、ハロウィンは日本にすっかり定着したと思われる。ただ、実態はもとの宗教行事の意味としてではなく、日本のコスプレ文化が大きく取り上げられたイベントとなっている。アンケート調査からも分かる通り、現在はまだ若年層のみかつ局地的な都市部でのみの流行である。ハロウィンを日本に広めるためには、ハロウィンの本来の意味を知ることによって幅広い年代の広い地域に受け入れやすくなるだろう。ハロウィンの起源であるドルイド教の祭りは、農業や牧畜の活動を含む農事暦の行事に関連し、自然崇拝主義である²⁹。日本にも古来から農業に関する祭りはたくさん存在する。例えば、山口県の稲穂祭りは豊作を祝う祭りである。また、愛知県のぬき穂祭りや岐阜県のどぶろく祭り³⁰など日本には各地に収穫を祝う祭りが存在する。また、日本人は八百万の神³¹が存在すると思えるように、日本人も根底には自然を崇拝している。宗教の自体は違うが、考え方はとても似ているのである。このことを踏まえると、今後ハロウィンはこうした日本の伝統的な収穫祭と結びつくことで、日本における一文化としてより幅広い地域や年代に定着していく可能性がある。

本稿ではアンケート調査を実施し、ハロウィンの日本での現在の状況を考察

²⁹ ミランダ・J・グリーン（訳：大出健）『図説 ドルイド』東京書籍株式会社、2000 年

³⁰ 宮本常一『日本の年中行事』八坂書房、2012 年。

³¹ 坂本勝『古事記の読み方：八百万の神の物語』岩波新書、2003 年。

してきた。以上を我々はハロウィンが日本に定着していく可能性の一考察とする。

参考文献（日本語論文）

安達理恵「日本人の異文化受容態度に関する実証的事例研究—異文化理解教育の方向性を考察する異文化間コミュニケーション研究」『名古屋大学大学院国際開発研究科博士論文』、2006年。

安達理恵「日本人の異文化需要態度にみられる傾向—地方都市での年代別・国別態度調査より—」『名古屋外語大学外国語学部紀要』第35号、pp. 153-173、2008年。

向井有理子、渡部美穂子「異文化受容態度：日・独・英の比較」『都市文化研究センター』2003年。

村上良夫「クリスマスの起源—その歴史的背景—」pp. 241 - 250, 『北陸大学 紀要』第12号、pp. 241 - 250、1998年。

金 命柱「占領下(1945-1952)日本のクリスマス」『国際日本学論叢』9号、2012年。

関口英里「エンターテイメントとしての祝祭空間—ハロウィン分析を通して見るアメリカ社会—」『同志社女子大学学術研究年報』54(1)号、pp. 123-146、2003年。

田畑恒平、西条昇、木内英太「ハロウィン・イベントのライブストーリーミング：『マスコミュニケーション受動』から『エンターテイメント共創』へ」『江戸川大学紀要』26号、2016年。

参考文献（日本語本）

浜本隆志・柏木治 『ヨーロッパの祭りたち』明石書店、2003年。

栗原 典子・著 『スラヴ世界のイースター・エッグ -ピーサンキからインペリアル・エッグまで-』株式会社 東洋書店、2008年。

アンソニー・F・アヴェニエ・著 『ヨーロッパ祝祭日の謎を解く』株式会社 創

元社、2006 年。

浜本隆志『バレンタインの秘密一愛の宗教文化史一』平凡社、2015 年

福田アジオ、菊池健策、山崎裕子、常光徹、福原敏男『知っておきたい 日本の年中行事事典』2012 年。

アンソニー・F・アヴェニ『ヨーロッパ祝祭日の謎を解く』創元社、2006 年。

保坂高殿『ローマ史のなかのクリスマス 異教世界とキリスト教 1』教文館、2005 年

クラウド・クラハト、克美・タテノクラハト『クリスマスーどうやって日本に定着したか』角川書店、1999 年。

ヘクター・マクドネル（訳：山田美明）『ケルト、神々の住む聖地 アイルランドの山々と自然』株式会社創元社、2014 年。

フィリップ・ヴァルテール（訳者 渡邊浩司/渡邊裕美子）『中世の祝祭 伝説・神話・起源』株式会社原書房、2007 年。

植田重雄『ヨーロッパの祭と伝承』早稲田大学出版部、1985。

浜本隆志・柏木治『ヨーロッパの祭りたち』株式会社明石書店、2003 年。

栗田房穂『ディズニールゾートの経済学』東洋経済新報社、2001 年。

ミランダ・J・グリーン（訳：大出健）『図説 ドルイド』東京書籍株式会社、2000 年。

宮本常一『日本の年中行事』八坂書房、2012 年。

坂本勝『古事記の読み方：八百万の神の物語』岩波新書、2003 年。

参考文献（新聞等）

「月曜も楽しむハロウィーン、雑貨店、自宅用グッズを充実、市場規模、バレンタイン並み、親子で着られる衣装も」『日経MJ（流通新聞）』2016 年 9 月 7 日号。

参考文献（英語論文）

Robert Chambers, *The Book of Old English Customs*, (London: Country Life, 1966)

Alexander Howard, *Cavalcade: A Diary of British Festivals and*

Customs , (London: Arthur Barker 1964)

参考 URL

『渋谷フェス Halloween 2015 特別協賛のお知らせ ならびに mercari Halloween Night 開催報告』(https://www.mercari.com/jp/info/20151009_halloween/ : 情報最終確認日 : 2016 年 9 月 13 日)

『ホットペッパーグルメリサーチセンター』(http://www.recruit-lifestyle.co.jp/news/pressrelease/gourmet/nw13371_20151016 : 最終確認日 : 2016 年 9 月 21 日)

『リクナビ next ジャーナル』
(<http://next.rikunabi.com/journal/entry/20150501> : 最終確認日 : 2016 年 9 月 27 日)